

研究所開設10周年を顧みて

山 岡 栄 市

佛教大学に赴任した昭和47年4月5日の教職員会議で、「この4月から歴史研究所と佛教社会事業研究所を開設する」との当局の発表には少々驚いた。同じ年に2つも研究所を新設するというその積極的企画と意欲に感銘したのである。というのもわたしは、前任の国立大学（島根大学）で、全学的基盤に立つ「山陰文化研究所」の創設や運営に一方ならぬ苦勞をした経験をもっていたからである。

佛教大学社会科学の創設は昭和43年、5年後の昭和48年には早くも大学院修士課程が設置された。それは当然に博士課程設置を予想するものであった。修士課程の設置は比較的やさしいが、博士課程となると俗にいう“学者の卵”を育てる場であるから、そこに学ぶ学生の資質もそれを受入れる研究指導スタッフも抜群でなければならず、そこへ踏切るには相当な決断を必要とした。幸いに隣接の社会福祉学科との協力で昭和51年4月、全国にただ1例（明治学院大学）しかない珍しい呼称の〈社会学・社会福祉学専攻〉が誕生したのであった。さらに2年後の昭和53年4月1日に待望の社会学研究所が開設されたが、それは学部とくに大学院と唇齒輔車の関係に立ち、社会学研究の水準を高めるとともに大学全体としての体質を強めることを主眼とするものであった。開設以来、研究スタッフや所員各位の並々ならぬ積極的・継続的努力と、大学当局の物心両面にわたる援助・協力により着々とその成果を積重ね、今日10周年の佳き日を迎えられたことは、当初その開設・運営に関係した1人としてまことに感慨深いものがある。

佛大社会学研究所の目ざす研究領域は、①地域研究と②宗教社会学研究とされた。地域研究は佛大博士課程の特色の1つである地域研究に対応するものであったが、さらに一般的にいえば昭和30～40年代におけるわが国の経済的・社会的変動→大都市圏への人口移動と農山村の過疎化→伝統的な家族・同族・村落共同体結合の弛緩→種々の新しい社会問題の発生等による地域社会の急激な変貌に対応して、新たなる〈地域社会学〉の構想が必要であったからである。それまで大学のカリキュラムにふくまれていた「村落社会学」や「都市社会学」に代って〈地域社会学〉なる名称が現われたのもこの頃であった。都市と農山村の両方をにらんだ地域研究が要請され、地方生活圈（昭和43年、建設省）、広域市町村圏（昭和45年、自治省）、定住圏（昭和53年、国土庁）等の行政施策も相継いだ。このような状況の中で地域研究のプロジェクトとして「滋賀県中部広域市町村圏」の調査研究が3年計画（昭和53～55年）でとりあげられ、さらに「西陣地域の社会学的研究」も5年計画（昭和53～57年）で同時に設定された。西陣調査は社会科学が昭和48年以降取組んだ「京都市民意識の研究」の延長でもあった。

さらに宗教社会学の柱を建てたことは、佛教大学の研究所としての特色をもたせるためであった。昭和53年の関西社会学会大会が佛教大学で開催されたとき、そのシンポジウムのテーマとして〈現代社会と宗教〉を掲げたのは本研究所の希望に基づくものであった。そこではキリスト教入信者の多いこと、宗教と政治、宗教と人権等が論議されたと記憶する。

開設後10年の間に前記2つのプロジェクトは一応終わったようである。紀要の第1～2号（1980～81）に中部広域圏の調査実績、第3～6・9号（1982～85・88）に西陣の調査実績が掲載されている。よ

くどこまで集中的継続的に努力されたものと感銘を深くしている次第である。

しかし、この尊い業績も一応の中間報告であり、学界の評価は今後のことに属する。しばらくの年数において再度同じ対象にアタックする必要があるだろう。その間、資料を棚上げにするのではなく、いわば時折それと対面する心の用意がなければならない。そこから偶然に珠玉を見出すことがあるかも知れない、資料は生きものである。ともあれ研究所にとって共同研究は大切である。このことは、共同研究をベースにして、ある特定の視角から1つの焦点を追求する個人研究を拒むものではない。その意味で次の2、3のことにふれたい。

- ① 最近社会学科では宗教学や政治学に関心をもたれる人がふえているときくが、これらの方々を中心として宗教社会学の現代的課題に取り組んで頂きたい。
- ② 佛教大学には現在いくつかの研究所が併存しているが、学際的研究の重視される今日、各研究所の横断的協力が必要と考える。
- ③ 中国との交流の緒が開けたようであるが、異なる文化をもつ人びととの接触による文化変容、とりあえずは在日外国人の生活史を研究し、その宗教的背景や地域的風土性の特徴を明らかにする。

(1988.12.7)